CHIP―チップ―

篠崎　海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＩＰ―チップ―

【Ｎコード】
Ｎ９２５１Ｚ

【作者名】
篠崎　海斗

【あらすじ】
仮想都市、遠音（とおん）で起こったある事件に巻き込まれ”ＣＨＩＰ”という道具を脳に埋め込まれたごく普通の高校生（？）である雨宮健吾と、それを取り囲むようにして現れた能力者。そして”ＣＨＩＰ”を取り除くために、事件を解決しようとする被害者（雨宮健吾も含む）。はたして、無事に事件を解決して”ＣＨＩＰ”を取り除くことができるのか！？筆者もまだどのようにするかは決めてません。楽しみ楽しみ！！
シリアスを基本として、たまにコメディーを挟み込んだ痛快ＳＦフ

アンタジー。

―嵐の前の騒がしさ―

……俺は巻き込まれてしまった。そこで起きていた出来事に……

その事件が起こる日の朝、俺は、いつもより遅い時間に家を出た。もっと早く家を出ていれば、あんなことにはならなかっただろう。俺は消されかけた。いや、正確に言えば、消された後に蘇らされたの方が適切かもしれない。

俺の名前は雨宮健吾（あめみやけんご）。一見すれば、普通の男子高校生。しかし、普通の男子高校生と違う点といえば、親、兄弟、そして親戚がいなくて、小さいころから一人暮らしってところかな。他には特に変わったところは無い。頭がずば抜けていいとか、運動神経があるとか、そういうのではない。ただの平凡な……いや、下手をすれば、平凡以下のステータスかもしれない。つまりそういうどこにでもいる高校生なのだ。

ここは遠音（とおん）。人口２７０万人ぐらいの都市。自国の中枢都市であり、科学が非常に進歩している。政権というものがひとつしか存在していない。そのせいで近頃までは、独裁政治が続いていた。

家を出て、電車に乗り、しばらく歩くと俺が通っている天雅崎学園（あまがさきがくえん）に着く。

「いい匂いだ。」

この学園の校門には、毎年見事な梅の花が咲き誇り、もし色で表すならばピンク色の、誰もが和むような香りを放っている。その香りをかぐたびに、俺は少し心が広くなる気がするのだ。

すると突然、後ろから殺気を感じた。棒状のものが綺麗な放物線を描きながら、俺めがけて飛んできたのである。それを俺は間一髪でよけた。そしてその棒状のものの落下地点を見てみると、それはまぎれもなく矢であった。

「バカかお前は！！俺を殺す気か！！」と俺は叫んだ。すると

「チッ！はずしたか……」と矢を放った人物が悔しげにつぶやいた。

「おっはよー健吾！！元気してた！？私はバリバリ元気だよー」俺を殺そうとしていた人物が何事も無かったように会話を始めた。

「人を殺そうとしておいてよくもまぁそんなに豹変できるもんだなぁ。」冷静に返した。

「あはは。だって私信じてたもん。きっとよけるだろうって。最悪当たったときは当たったときだしね！！そのときは運が悪かったって地獄で一人で愚痴をこぼしとけ！！」

この女は、白峰可憐（しらみねかれん）、鬼だ。俺の幼稚園時代からの幼馴染。外見だけなら、学園一の美少女と言っても過言ではない程かわいい。普通の男子なら、そんな美少女の幼馴染がいるだけで幸せだと思うはずだが、こいつの場合は違う。こいつは悪魔だ。ものごころがついたころからずっと、俺をサンドバッグ同然の扱いをしている。運悪く、俺はこいつと一緒の学園に通うことになってしまっている。家も隣で近いため、毎朝一緒に学校に行こうと誘いに来るのだが、俺はこいつと並んで学園に行くのが怖いため、毎朝家を出る時間を変えて学校にいっている。弓道部主将であり、地方の大会で何度も優勝をしている強者だ。よく俺はこんなやつの放った矢をよけることがで

きたなぁ。と思う読者の方も多いかもしれない。安心してください。僕は毎日あの女の弓矢を喰らっているので、矢をよける能力だけは世界一です。もうこんなやつの矢なんて当たりませーん。

「なんで天国じゃなく地獄なんだ？」俺はさっきの可憐の発言に対する疑問をぶつけた。

「だって、近頃私を置いて一人で学校に行ってるんだもん。寂しかったんだよ！！」

言えない！！絶対に言えない！！それは、お前と並んで学園に行くのが怖いからだよ。ハハハ。なんて口が裂けても言えない！！言ったら確実に殺される！！どうする俺？この場を切り抜ける方法は……うん？なんでこいつこんなに涙目なんだ？そういえば最後のセリフの「寂しかったんだよ」がちょっと引っかかるなぁ。まさかこいつ、ひょっとして俺のこと……
もしそうならこれで助かるかも知れない！！

「だってアレじゃん。俺、お前の、サンドバッグ。一緒に歩く。すると、お前、俺殺す。ＯＫ？」よし、１００点満点だ。これだけ助詞を抜いたら、あの馬鹿にも理解できるだろう。これで俺の清々しい朝は守られそうだ。やったね。応援いただいた読者の皆様、誠にありがとうございました。つきましては、今度の週末、パーティーでも開こうと思います。ぜひ、参加ください。うーん、応援者への謝礼も済んだし、可憐の顔色を見てみよっかな。きっと天使のようなかわいい顔になってるんだろうな。

「……コロス」

「へっ？」聞き取れなかったな。妙に暗い顔をしているし……なに

か悩み事でもあるのだろうか？

「何か悩み事かい？俺でよければ相談に乗ろうか？」今日の俺は、あの梅の香りのおかげかどうか知らないが、ものすごく気分がいいんだ。ちょっとやそっとの悩みぐらいなら解決できるさ。

「オマエヲコロス！！」

……背筋に悪寒が走った。やばい殺される。でもなんで？俺の言動は完璧だったはず、なのになぜ？ひょっとしてこいつ、風邪を引いているのか？そうだ、そうに違いない。いつもはカモ並みの頭の悪さなのに、風邪を引くとさらに悪くなるって言うのか。だとすると爆笑ものだな。ハハハ。よし、風邪を心配してやったら好感度アップだな。すると俺に対する邪知暴虐な行為も少しは改善されるだろう。俺って天才だな。

「あなたの風邪はど……」最後まで言う前に、ヤツは俺に向けて矢を放っていた。さすが弓道部主将。みごとに矢は、俺の自慢の頭に突き刺さっていた。

―嵐の前の騒がしさ―（後書き）

初めまして篠崎海斗（偽名）、中学三年生です。（受験前なのに大丈夫か？）
初投稿初執筆ですので失敗や、読者の方々からするとチンプンカンプンな表現が多いことや、何コレぜんぜん面白く無いじゃん（笑）とかあると思いますが、ぜひよろしくお願いします。

梅の香り

目が覚めるとそこは、保健室だった。

「なぜ俺はここにいるんだ？」それまでのことを思い返して見た。すると校門で幼馴染に矢を射られたという情けない出来事を思い出した。

「大丈夫？すごく出血していたけど？」保健の先生の真田麗子（さなだれいこ）先生が、色気の効いた優しい声で話しかけてきた。この先生は、なんといっても胸がでかい。そして髪が長いのに手入れが行き届いているのか、枝毛などが全く無い。いつ見ても綺麗な先生だな。俺はつい感傷に浸ってしまった。

「何とか大丈夫です。でもどうして俺は助かったんですか？」

「校門で人が倒れてるって言われて行って見たらあなたの頭に矢が刺さっていて、そして保健室が近かったから、連れてきて治療したのよ」

……近いからって治療したら直るのか…

「それより、今日はもう遅いから帰ったほうがいいわよ」そう言われて外を見てみると、あたり一面真っ暗だった。

「えっ！！今日何もしてねぇじゃん、俺！！」登校途中に殺られた俺は、一日中寝ていたらしい。

「女の子も待っているようですしね」先生が、からかうように教え

てくれた。女の子って誰のことだろうか？まだ痛みが残る体を、半ば無理やり起こして、ゆっくりドアの方に近づいて行き、そのまま部屋を出た。

殺人現場（俺が殺られた場所）にいってみると、そこには……悪魔がいた。

「だ、大丈夫？」白峰可憐（しらみねかれん）がいた。

「おかげさまで、頭に矢が突き刺さった、織田　信長型ロボットができるところだったよ。感謝している」皮肉まじりでそう返した。

「じゃ、じゃあ帰ろうか。あと十分ぐらいで、駅に電車が来るころだし……」天雅崎学園は、最寄の駅からとても近く、５分あれば着くようなところにある。

「たしかにそんな時間だな。帰るか」門をくぐるとき、いつも匂う梅のにおいが、その晩はまったくしなかった。これから起こる恐怖を、梅は予言していたかのように。

駅に着き、電車に乗り、あと２駅で家から一番近い駅というところまで来た。

それまで、可憐とは一言も会話を交わしていない。朝のようなことがあったから、当たり前だとは思うが……やっぱり可憐も引きずっているのかな？

「今朝のことは、あまり気にしてないぞ」慰めるように言ってやった。俺はなんていいやつなんだろうか。

「……」そうとう参ったみたいだ。これからはしてほしくないも

のだな。

すると突然、電車がものすごい勢いで揺れた。そして一秒もたたないうちに、俺の意識は遠くなっていった。

梅の香り（後書き）

あぁ、受験はなぜ、俺らの時間を奪って行くのだろうか。

あらすじを書いている途中に気づいたんですけど、あらすじ内にネタバレ事項が多い……あらすじって恐ろしい……

一応、あらすじを書いた後にプロット作って、ストーリーの大枠を考えたから、あらすじを元に執筆した小説ってところですかね。だからネタバレ被害を回避できそうです。

―The die is cast.―

意識が戻ると、そこは漆黒の闇の世界だった。ケータイを見た。やはり圏外であった。

「チッ、本日二回目の気絶ですか」俺は、気絶することが当たり前なことに思えた。幸い、軽い怪我ですんでいたので、能天気だったのである。

俺は、電車が、脱線か何かしたのだろうと思っていた。暗くて周りの状態が、あまりわからなかった。そして、他に生存者がいるかどうかを確認しようとした。すると、何よりも先に優先しないといけない人物の名前が脳を横切った。

「可憐！！」事故にあったとき、一番近くにいた知り合いの名前である。おそらく、まだ近くにいるはず。そう信じて、俺は暗闇の中を手探りで探した。

2、3分たった頃、突然背後から、蚊の鳴くような声が聞こえた。この声の主は……

「可憐！？そこか！？」よかった、無事に生きていた。あとはここから抜け出して、ケータイの電波が届くところに行き、助けを呼べば、残りの生存者も助かるし、無事に帰れる。そう考えた俺は、あさはかだった。

なぜなら、もしもそれが事故ならばという前提があっての、救済法であったからである。それが事故ではなく、人為的なものならば、生存者など出ない。いや出すはずが無い。

その事故が、事件だと気づくのに時間はかからなかった。違う車両

から、断末魔の叫びが聴こえたからである。あきらかに銃声と思わしき音と同時に……

俺の能天気は、その音が聞こえてからあせりに変わっていった。電車奪取（トレインジャック）かと考えた。そして生存者を一人も残さない、凶悪なテロリストが関わっているとも考えた。奇跡的に可憐も同じことを考えていたみたいだ。俺は、ご自慢の矢が刺さった頭で、必死に打開策を考えた。まず、敵の人数がどれくらいいるかということを知らなければならない。そして同時にそれらの配置、行動パターン、目的を性格に把握しなければならない。これらをたたき出し、正確な脱出ルートを導き出せば、無事生還できる。しかし、これらの要素の中にひとつでも不確定要素が含まれていれば、生還できる確立は、一気に下がる。そのことをふまえて、慎重に計算していった。

「可憐！まずは、敵の人数を確認する。いうとおりにしてくれ」そう言って俺は、可憐に、”力を合わせて脱出大作戦”を伝えた。今思えば、その作戦の内容はどれも単純だった。相当俺はあせっていたんだろうなぁ。

暗闇に目が慣れてきて、視界がずいぶん開けてきた。

「――よし、オペレーション　スタート！！」可憐に小声でそう告げた。始まりの合図だ。作戦開始と言うのではなく、オペレーション　スタートと言うところが、この作戦の味噌だ。俺は、冷静さを取り戻すために、必死にユーモラスなことを自分に言い聞かせた。そうでもしなければ、やっていけなかった。

俺と可憐は、二手に分かれて、敵の人数を数えていた。可憐は、銃声が聴こえた車両と反対側の車両、俺は、銃声が聴こえた側の車両を調査した。

一通り見終わったが、不信なものは影すらなかった。
あの銃声は、空耳だったのか、と考えた。しかし、可憐も聴いており、やはり実際に起こったことだと考え直した。

そして可憐と再開し、情報交換し合った。やはり、可憐も犯人らしき物影は何も目撃していなかった。
空耳だなぁと思った瞬間、俺は奇妙なことに気がついた。

「この電車に、俺ら以外の生存者が乗っていない！！」それはとても奇妙なことであった。
俺らが気絶していた間に、全員逃げ出したということも考えられなくもないが、その場合、事故が起こってから時間がかなり経つはずなので、助けやマスコミがとっくに到着しているはずである。

「だったらどこに消えたんだ？」俺は、独り言を言ったつもりであった。しかし、この出来事に恐怖を感じた可憐は、気が気で無かったようだ。

「神隠し……とか？」可憐が、泣きそうな（いや、正確には泣いていた）声で自分の意見を提示した。

「たしかに神隠しなら、乗客が消えたことも説明がつく。しかし、神隠しという現象を、まず解明しなくてはならないから、その意見はボツだ」俺は、怪奇現象なんか起こるわけがないと可憐に諭してやった。これで少しは恐怖感がなくなるだろうと思って言ったのだ。

その瞬間、可憐の様子が急に変になった。何かに脅えているようである。なんてやつだ。せっかく俺が、お前から恐怖を拭い去ってやったのに、まだ脅えているのか。やれやれ。

俺は、緊張感を忘れすぎていた。可憐が、俺の背後を指差していることに気づかなかった。暗くてよく見えなかったのである。

「おとなしく、殺されろ」後ろから、死人のように冷たい声が聞こえた。若い女性の声であった。次の瞬間、銃を頭に突きつけられた。そして、可憐ともども撃たれてしまった。

俺は今でも、その女性が、俺たちの死に際に放った言葉を覚えている。

「Ｔｈｅ　ｄｉｅ　ｉｓ　ｃａｓｔ．」――賽は投げられた。――

―The die is cast.―（後書き）

物理の勉強をしていたため、投稿がいつもより遅れました。すみません。

それにしても物理って面白い単元だなぁって思います。今までの偉人さんが、汗水たらして編み出した公式を、自分が使って問題を解く。まさに連携プレーのような感覚ですね。

今回の話は、、、なんか大分方向性変わって、シリアスすぎない？大丈夫？みたいな感じになっちゃいましたね（笑）

主人公死んじゃったし（涙）

これからどうなるかは、次話に乞うご期待を……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9251z/

CHIP―チップ―

2011年12月31日02時45分発行